

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284123

研究課題名(和文) 倉富勇三郎日記研究 SMART-GSを使用した全文翻刻

研究課題名(英文) Study of Kuratomi Yuzaburo Diary; Making Full Transcription with Smart-GS

研究代表者

永井 和 (Nagai, Kazu)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：40127113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本近代史の1級史料でありながら、膨大な分量と読みにくい文字のために、その利用が一部の研究者のみに限られていた倉富勇三郎日記の翻刻をおこない、1928年末までの分については翻刻を完了した。また、1923年分と1924年分の日記に注釈をほどこし、人名索引と解説をつけて『倉富勇三郎日記』第3巻として、2015年2月に国書刊行会より出版した。A5版2段組で総頁数1492頁という大冊となった。翻刻作成にあたっては、京都大学文学研究科で開発中の史料・文献研究支援ICTツールであるSMART-GSを使用した。なお、1925年と26年の日記については『倉富勇三郎日記』第4巻の刊行にむけて作業を進めている

研究成果の概要(英文)：KURATOMI Yuzaburo(1853-1948) was a bureaucrat-politician of Meiji, Taisho and early Showa era, being the Chairman of Privy Council from 1926 to 1934. He is famous for his detailed diary which he continued to keep from 1919 to 1947. It is the first class historical document of the political and social life of Imperial Japan and reveals a lot of inside stories about the Imperial Household and the Privy Council. However, due to his illegible handwriting and enormous volumes, it is very difficult for even a professional researcher to read the diary. To make it easier, we are making a transcription of Kuratomi diary from 1919 to 1934 and already have published a part of them (the diary of 1919-1924). To make the transcription of the diary, we use smart-gs, a new ICT tool, developed by the Graduate School of Kyoto University.

研究分野：人文学

キーワード：倉富勇三郎日記 倉富勇三郎 SMART-GS 宮内省 枢密院

1. 研究開始当初の背景

(1) 倉富勇三郎(1853~1948)は、明治・大正・昭和戦前期に活躍した官僚政治家であり、司法省、統監府・朝鮮総督府、内閣法制局、宮内省に奉職したあと、枢密顧問官となり、1926年から1934年まで8年間にわたり枢密院議長をつとめた。倉富は膨大かつ詳細な日記を残したことでよく知られており、そこには彼が職務上知りえた情報はもとより、宮内省、枢密院、内閣、司法部、朝鮮総督府の高官達との間でかわした会話の内容が克明につづられている。

(2) 1970年代後半に国立国会図書館憲政資料室で倉富日記が公開されて以来、数多くの研究者がこれを利用してきた。その史料価値の高さは多くの研究者が一致して認めるところである。しかしながら、その分量が膨大である(現存しているのは1919年初めから1947年11月末までの日記304冊に、東京控訴院検事長時代の執務日誌である1905年7月~1906年8月の4冊を加えた308冊である。このうち1945年初めから1947年11月末までの7冊を除いた301冊が国立国会図書館に所蔵されている)うえに、普通の人間にはとても判読できそうもない、クセのある手書き文字で細かくビッシリと書かれているため、それなりの訓練を受けた専門家でなければ、日記を読むことができない。また専門家であっても、そのあまりに膨大な量のために、日記全編を通読した者はほとんどいない。

(3) 研究代表者の永井は倉富日記をはじめて読んだときから、この貴重な史料を研究者だけの世界にとどめず、広く一般国民のさらには世界中の共有財産とすべきではないかとの思いを有していたが、今まで何度かそれが試みられては挫折したことを知るにつけ、とうてい不可能だとあきらめていた。しかし、倉富日記への一般的な関心が高まるのを見て、日記を用いて研究をおこなう段階から、日記そのものをより多くの人間が読めるようにすべき時期に、今やさしかかっているのではないかとの思いが次第に強まり、及ばずながらその翻刻・刊行に挑戦してみようと思いつき、2008年に倉富勇三郎日記研究会を発足させ、翻刻・刊行事業に着手することにした。

(4) 幸いにして、2008年度から5年間にわたり科学研究費補助金の補助を受けて(基板研究(A)課題番号:20242017)翻刻事業を開始することができた。その成果として『倉富勇三郎日記』第1巻、第2巻を2010年と2012年に刊行した。

(5) 本研究計画はそのあとを継承するものであり、倉富勇三郎日記の翻刻をさらに進め、第3巻、第4巻、第5巻の刊行をめざすものである。

2. 研究の目的

(1) 『原敬日記』に匹敵する日本近代政治

史研究上の第一級史料である倉富勇三郎日記を翻刻し、注釈と解説をほどこすこと、それによって難解な手書き文字で書かれているため、ごく限られた少数の研究者たちだけしか利用できなかったこの貴重な歴史資料を、学界のみならず、日本国民さらには世界中の共有財産とすること、さらに翻刻した日記を学術図書として出版することが第1の目的である。より具体的には、

1933年までの日記の翻刻をできるかぎり進める。

『倉富勇三郎日記』第3巻を刊行し、さらに続けて第4、第5巻の刊行をめざす。

『倉富勇三郎日記』第6巻の刊行準備に着手する。

(2) 倉富日記の翻刻作業を進めるにあたって、京都大学文学研究科の情報・史料学研究室が開発を進めている文献学・史料学研究室の新しいツール SMART-GS を使用する。SMART-GS はデジタル画像化された手書き文字資料の翻刻と解析のための新たな ITC 研究支援ツールである。これを利用して倉富日記の翻刻をおこない、このツールが実用にたえるものであることを検証するとともに、手書き文書の読解を必須のものとする歴史研究において、新たな技法の確立にむけて実験をおこなうことが、本プロジェクトの第2の目的である

3. 研究の方法

(1) 倉富日記は難読をもって有名であり、訓練をつんだ人間でないと読解は不可能である。また、記述量が膨大であるため、計画どおりに翻刻を進めるには、かなりのスピードで読解、翻刻できるだけの技量が要求される。また、いかに技量があったとしても、単独の研究者が独力で全部を翻刻するのは、まったく不可能だと断言できる。今までそれに挑戦した者はいるが、誰一人として成功していない。かりに可能だとしても、たいへんな時間を要するのは明白である。倉富日記の翻刻・刊行事業は、その目的達成のために協働する集団の力があって、はじめて実現可能である。

(2) 本研究では、研究代表者である永井の統括のもとに、前計画において翻刻事業に参加した連繫研究者3名(小山俊樹、佐野方郁、河西秀哉)と研究協力者3名(川寄陽、富永望、宮田昌明)の計7名が協力して、翻刻および刊行事業を進めていく体制をとった。7人は前計画において倉富日記の読解に従事し、高い翻刻能力をもっている。

(3) 業務分担としては SMART-GS を使用して日記の翻刻と校閲を小山、佐野、富永、宮田が担当し、校閲済みの日記に注釈をほどこし、整形をして印刷原稿を作成する作業には永井、河西、川寄が従事した。また永井は、刊行にあたり解説を作成した。

(4) 前計画では、日記を翻刻・刊行するだけでなく、日記を材料にして、大正・昭和期

の政治・社会についての歴史研究を行うことも目的としたが、本計画では翻刻・刊行に注力するため、研究分担者を設けず、翻刻・刊行事業に従事する者は連携研究者および研究協力者として、計画に参加する体制をとることとした。目的をシンプルにすることで、研究組織を単純化し、より少ない研究経費で成果をあげることをめざした。

(5) SMART-GS の開発者である林晋は連携研究者として技術的な問題について助言を行い、また永井からは倉富日記の翻刻作業を進める過程で生じたさまざまな問題点と改良要求を林にフィードバックした。相原は翻刻作業を共同で進めるために必要なネットワーク環境の提供をおこない、さらに技術的な助言を行った。

4. 研究成果

(1) 1923年と1924年の日記を『倉富勇三郎日記』第3巻として国書刊行会より刊行した。ただし、最初の予定では2013年中に刊行する予定であったが、大幅に遅れてしまった。その理由は、前計画において研究分担者として日記の刊行作業に尽力した桂川光正の急逝により、本計画では彼の参加協力が得られなかったことによる。また、第3巻の日記は、その分量も第1巻、第2巻に比べて増えており、刊行用稿本作成に必要な作業量が予想よりも大きく増加したことがそれに重なり、刊行の遅れとなってあらわれた。

(2) 第3巻の刊行が遅れたため、そのしわよせは第4巻以降に及び、本計画の事業期間中に第4巻、第5巻を刊行することができなかった。第4巻については現在刊行用稿本作成中であり、その刊行は来年度になる見込みである。

(3) 刊行用稿本作成の元になる、日記の翻刻作成についても同様に遅れており、現在は1928年末しょうない、すなわち第5巻分までが翻刻済みである。

(4) 本研究計画は2015年度で終了したが、その成果をもとに、今後とも翻刻・刊行事業は継続していく予定である。

(5) 第3巻刊行のために、解説を作成したが、そこで倉富日記を主たる史料とすることで、従来まったく知られていない歴史的事実を明らかにすることができた。そのいくつかを研究成果として紹介しておきたい。

(6) 1885年の宮中・府中の分離以降1920年代末までの宮内省の組織の変遷は3つの時期に区分できる。第1期は1885年の宮中・府中の分離から1907年の宮内省官制の改正まで、第2期は1907年改正から1921年の宮内省官制まで、第3期はそれ以降である。第1期は土方久元・田中光顕時代、第2期は渡辺千秋・波多野敬直時代、第3期は牧野伸顕・一木喜徳郎時代と命名することができる。

(7) 宮内省幹部(奏任官)の人事の変遷を長期的に分析すると、第2期になって宮内省でも高等文官試験合格者の任用が増加する。

これは、1907年に宮内官任用令が制定されて、宮内官についても原則試験任用が制度化されたためである。しかし、より詳細に人事配置をみていくと、同じ第二期でも波多野敬直時代に試験任用宮内官の数がより増大していることが判明する。これは田中光顕時代から長期にわたり宮内省を牛耳ってきた渡辺千秋宮内大臣が汚職問題で失脚し、それにとりなう省内の粛清人事と人員整理の結果、古参の宮内官(そのほとんどが第1期からの在職者であり、試験任用者ではない)が退職し、かわって省外から補充された新任者の多くが文官高等試験の合格者だったことにより生じた現象であった。倉富自身の宮内省入省も、この波多野人事の一環としてなされた配置であった。

(8) 波多野時代に宮内省の人事の新旧交代が進み、その結果大正宮内省ともいべき陣容が形成された。その中心となったのは、内務官僚出身の石原健三宮内次官、山崎四男六内蔵頭、南部光臣帝室林野管理局長官(のち勅任参事官)、小原駿吉調度頭(のち内匠頭)、倉富勇三郎帝室会計審査局長官といった面々であった。このうち南部と小原は華族でしかも高等文官試験合格者という両面を兼ね備えた存在であった。

(9) 1921年に宮内大臣となった牧野は、この波多野時代に形成された大正宮内省の陣容を継承したのであった。宮中某重大事件を收拾し、皇太子の結婚問題を解決するために宮内大臣に就任した牧野は、次官を石原から静岡県知事の関屋貞三郎に代えただけで省内人事を凍結した。牧野と関屋は、はじめのうちは、波多野宮内省の陣容に頼りながら宮内行政を進めていくが、皇室財政の立て直しと省内の人心掌握のために、宮内省の組織改革と人員削減に着手した。それが1921年の宮内省改革であった。それゆえ、この宮内省改革案は南部、倉富、小原等によって作成された。しかし、急激な組織改編を好まない牧野は、彼らの作成した改革案をそのまま採用せず、その規模は押さえられた。そのことが一因となって、省内では小原と関屋の対立抗争がはじまった。関屋は非華族の高等文官試験合格組を糾合し、華族出身の小原と対立したのである。

(10) 宮内省改革と摂政設置さらには皇太子の結婚問題を解決した牧野は、宮内省の掌握に乗り出した。牧野は関屋を自分の片腕として信頼しており、それゆえ関屋支持の立場を貫いた。1923年から24年にかけて波多野時代の宮内省を支えていた南部、山崎、小原が次々と宮内省を去り、牧野・関屋体制が人事面でも確立されていく。

(11) 倉富は最初は省内対立に中立であったが、南部の退官を機に反関屋の立場を明らかにする。とくに関屋が静岡県知事時代に申請した静岡県の帝室林野の払い下げ問題をめぐって、払い下げ条件が不当であ

るとして、払い下げに反対の立場をとったことが決定的となった。関東大震災後に、省内融和をはかるために、牧野のリーダーシップを求める意見書を牧野に提出するが、その意見は聞き入れられず、翌年の小原退官後は、倉富は省内で孤立することになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

永井 和、SMART-GS を利用した倉富勇三郎日記の翻刻、European Association for Japanese Studies、2013年9月28日、京都大学

〔図書〕(計1件)

倉富勇三郎日記研究会(代表永井 和)
国書刊行会、倉富勇三郎日記第3巻、2015、1486

〔その他〕

ホームページ等

倉富勇三郎日記研究

<http://nagaikazu.la.coccan.jp/kuratomi/kuratomi.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

永井 和 (NAGAI, Kazu)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40127113

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

小山 俊樹 (KOYAMA, Tosiki)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号：90454503

佐野 方郁 (SANO, Masafumi)

大阪大学・日本語日本文化教育センター・
准教授

研究者番号：10403205

河西 秀哉 (KAWANISI Hideya)

神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：20402810

林 晋 (HAYASHI Susumu)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40156443

相原 健郎 (AIHARA Kenro)

国立情報学研究所・コンテンツ科学研究
系・准教授

研究者番号：90300706

(4)研究協力者

川崎 陽 (KAWASAKI Akira)

富永 望 (TOMINAGA Nozomu)

宮田 昌明 (MIYATA Masaaki)